

---

# 自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾、たいふうのなく頃に

台風X号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾、たいふうのなく頃に

### 【Nコード】

N4924J

### 【作者名】

台風X号

### 【あらすじ】

まだ見ぬ、惨劇を見よ。

第一話 リハーサル（前書き）

期待の御話が登場しました。

## 第一話 リハーサル

平成元年6月29日、台風排除計画委員会。

「台風10号を阻止する提案を考える。」

「何せ、台風十号なんか東京に上陸するんだぜ。」

「気象操作が、楽しいものかそんなに。」

この三人の名は、左から言うと、深澤識彦、伊達、現崎だ。

そして、私は、大山だ。

自然がお怒りになる頃に

原作 台風X号オールスターズ

企画 自然がお怒りになる頃に制作委員会

第一話 リハーサル

「テレビってこんな時がつまらねえーな。台風10号は神様だとか、台風10号に魔女が乗り移っているとかでたらめだぜ。」

「そうかしら、私にはそう思えないけど。」

彼女は、深澤の恋人。西根好根だ。

「お前は、最近の気象予報士に飽きないのか？」

「だって、一人の環境保護団体に洗脳されているんだもん。」

「続いてのニュースです。」

「何だ。」

環境保護団体を生み出した台風寺によれば、今年の台風は1万年に一回訪れる悪魔と言われる god Typhoon ことがわかりました。

平成元年6月30日

台風排除計画委員会。

深澤が、思っていることは当たっていた。

「こんなことは、台風寺が下した、政府に対するテロ行為だ。」

1989年6月29日日本の政府に気象操作技術の過ちが言われたが、無視されていた。

そして、1989年7月1日になった。

台風10号東京上陸まであと48時間

「時間がない、急いで冷却機を入れる。」

「深澤、今すぐ運命を変える。」

「現崎、貴様は、ふざけすぎだ。」

「いや、お前がふざけているんだ。台風10号を操るな、それに台風に命が宿っている。そんな、命を奪うなら政府も気象庁も日本も台風殺しの犯人になるんだぞ。」

「俺は、国民の安全を義務として扱う。だから貴様に台風の何がわかるんだ。言ってみる。どうせわからない癖に。」

そして台風10号上陸まで11時間が迫ってきた。

自然がお怒りになる頃に

台風10号、最大風速55メートル。

しかし、そのあととてつもないスピードで衰退した。

「よしっ、効いたか。」

しかし、自体は急転した。

不気味に笑いだした現崎。

「君達、死ぬるよ。自然がお怒りになる頃に東京は壊滅するのさハハハハハハ。」

「現崎、貴様。」

「怨むなら台風10号にしなよ。だってさ上陸まで2時間しかない

んだろ。」

そして、翌日7月4日。

ある場所に、本みたいな手紙が届いた。

「それ読んだ人は、其の時この現崎は、死んでいるでしょう1989年の悲劇は、日本の歴史にとって最大の出来事であり、我々にはわからない事件でもあります。其の事件は人間の愚かさが原因だと知っていても全貌は分かりません。」

自然現象東京壊滅事件の謎は、いまだに明かされていない。

第一話 リハーサル（後書き）

次回もお楽しみに。

台風崩しの章 第一話 台風殺し(前書き)

さあよいよよ始動です。

## 台風崩しの章 第一話 台風殺し

企画 台風の嘆き

制作 自然がお怒りになる頃にorたいふうのなく頃に制作委員会/台風排除委員会

著作 台風X号オールスターズ

1989年6月28日の東京。

気象庁に召集された9名。

深澤、伊達、現崎、大山、高田、松浦、石川、西堀、和田原の9名だ。

冷却材をたくさん入れた戦闘機五機。

それに乗るのは、6名。

よしむらだむれい  
吉村打牟礼、ひかりだはびんか光田葉旻賀、まるやまはいえん円山坏衍、みやぎしんらこう宮城新楽暁、にしねまりね西根好根、まえぎたりむ前木田利夢の6名だ。

15人のメンバーは、台風10号排除計画の前祝いのために盛り上がっていた。

「今年は、気象操作で一気にいける感じだったよ。」

「うまくいけばいいなと思います。」

台風10号の中に、奇妙なことが起こっているとは知らずに。

1989年6月29日の朝。

戦闘機五機を飛ばした

種まき作戦である。

たいふうのなく頃に特別コーナー

熱帯低気圧と台風の発達と衰退ってなに？

ゲストメンバーは、ひぐらしのなく頃にで、お馴染みの前原圭一と  
うみねこのなく頃にでお馴染みの右代宮譲治です。

そして、今回このコーナーの司会であります。たいふうのなく頃に  
でお馴染みの現崎龍馬です。

今回は、熱帯低気圧と台風の発達と衰退って何？というコーナーで  
すが、譲治君は、少しぐらいは分かるね。

「俺は無視かよ。」

みんなは、台風と熱帯低気圧は同一人物だってことは知っているよ  
ね。

そもそも熱帯低気圧は、海水温26℃～28℃以上のところで発生  
するんだ。それによって雲ができる。上昇気流による力が働いてね、  
雲ができるということは水蒸気が水に変わり、潜熱が放出され空気が

が暖められる暖められた空気の密度は小さく手軽いから気圧が低下するんだ。次第に上昇気流はパワーを上げていきひとつの渦を創る。それが熱帯低気圧になり、更に気圧が下がり上昇気流がより強力化していくと台風になるんだ。そして海水温が低い場所や陸地に行くとう台風は次第に衰えていく、そのあとに待っているのは衰退で最終的には、台風は熱帯低気圧または温帯低気圧になるんだよ。

「僕も、習ったことはあつたけどこんなに良い教え方されるのはうれしかったよ。」

「俺も、あまり知らなかった気象の世界に入り込めたぜ。」

たいふうのなく頃に特別コーナーでした。

戦闘機五機は、台風10号の外側の雲が見えたと言った。

松浦は、「だったら、種まき開始。」

「了解。」

台風10号は、進路が4。ずれた。

深澤は、いやらしいことを企んでいた。

「俺の右腕が4。ずれば痛っ。」

「深澤、私の胸を触ろうなんて200年早いだよ。」

戦闘機から、緊急情報が流れた。

現崎が突然、狂気の声を出した。

「台風を、殺すな。殺そうとしたら君達に台風の神罰を食らうことになる。」

大山は「台風の神罰？何だそれは。」

「台風の神罰は、進路に障害を与えたり、勢力に障害を与えると起こる。上陸6時間前に一人を生贄にして捧げ、上陸3時間50分前にそいつは死に至る。上陸直後に一人を鉄筋に刺すか押し潰すかという手段で殺す。上陸後20分後、雷で一人を殺す。上陸25分後に、風の力で窓ガラスを割り、二人の体を無残な姿にして殺す。上陸30分後、三人が絶望から逃げている時に、風で飛ばしたものを三人を押し潰して殺す。上陸後35分後、濁流で私から逃げる者は全員殺す。それが嫌なら4。ずらしたことは許す。それでもやるなら、5機の戦闘機は、私の力に潰される。」

西堀が「台風10号、貴様の要件は、断る。」

台風10号の声になっている現崎は「なら、戦闘機5機を打ち砕くか。グワアアハハハハ。」

現崎は、何が起こったかわからなかった。

そして、戦闘機は、突然上昇気流によって上にあげられていた。

下降気流に落とされた。

戦闘機にいる吉村が「メーデーメーデー」と言った後、通信が繋がらなくなった。

深澤は顔が青ざめた。

「台風10号、まさか戦闘機に乗っていた6人まで殺したんじゃ。」

高田は、涙目になっていた。

松浦が涙を流し始めた。

「嘘よ、戦闘機は落ちていないってだれか言ってよ。」

伊達は頭を抱え込んでいた。

「一体、どうすればいいんだよ。」

深澤は、西堀に向かって言いつけた。

「貴様が、要件を認めていればこうならなかったんだ。」

台風10号上陸まであと95時間。

石川は「台風って生命体だと思わない?」

ほかの8名は、台風は生命体だと思っていない。

石川は「俺の考えだけど、台風って雨と風の力がまるで猛獣が鳴いているかのような感じがするんだ。」

再び現崎が、台風10号にとりつかれた。

「フフフ、さすがですね石川。みんなは覚えといたほうが身のためですよ。台風がなく頃に東京は壊滅する。ハハハハハハハハ。」

現崎は、またしても分からない状況だった。

台風10号東京上陸まで90時間。

次回

第三話 怒り。

たいふうのなく頃に 台風崩しの章。

台風崩しの章 第一話 台風殺し（後書き）

ひぐらしとつみねこから枝分かれをした作品です。自然がお怒りになる頃にシリーズをこれからも応援してくださいお願いします。

台風崩しの章 第二話 怒り（前書き）

ここから先が少し怖かったりと物凄い展開が待っています。

台風崩しの章 第二話 怒り

現崎は、思った。

「みんなは、なんで台風の神罰というわけのわからないことを言っているのだろう。和田原さんに聞いてみよう。」

現崎は、和田原に尋ねた。

「君にとりついた悪霊みたいなのが、言っていたんだ。」

西堀と大山は、台風の神罰を信じないと断言した。

台風上陸まであと53時間。

台風の勢力は、カテゴリー4になっていた。

大山は、叫んだ。

「過冷却ミサイルの発射準備をしろ。」

発射には9時間がかかる。

伊達は、台風上陸までの時間を見た。

「台風上陸まであと44時間か。これぐらいの時間なら間に合いますね。」

しかし、またしても台風の狂気が現崎にとりついた。

「忘れたか、台風の新罰を最初の神罰が下ることになっても知らないからな。」

石川は、何か嫌な予感をしていた。

台風上陸まであと35時間。

「台風を弱らせる。」

「過冷却ミサイルの発射準備が完了しました。」

発射のカウントダウンを始めた。

過冷却ミサイルは、発射された。

台風上陸まであと21時間。

それからしばらくたった。

ひぐらしとうみねことたいふうの気象学講座。

今回は、私、たいふうのなく頃にの、松浦儀音です。

うみねこのなく頃にでお馴染みの右代宮戦人だ。

ひぐらしのなく頃にでお馴染みの入江京介です。

今回のテーマは、台風の国際分類って何？です。

日本では台風は、熱帯性低気圧と台風に分けられるけど国際では、違うということ知ってた？

「知らなかった。」

「分かりませんでした。」

熱帯低気圧は、国際では、tropical depression  
ってこのよ。

少し階級が上がると、tropical stormって言うて更に階級が上がるとsevere tropical stormになるの。

そして、Typhoonと呼ばれる階級まで行くの。風速は、0から33knotの時は、tropical depression  
というの。34から47knotまでをtropical storm  
と言って、48から63knotまでをsevere tropical  
stormと呼んで、Typhoonは、64knot  
以上を言うの。

「皆さんは勉強になりましたか？」

台風上陸まで6時間と30分。

大山の姿がなかった。

壁に少しだけ紅いものが見えた。

松浦は、怯えながら言った。

「まさかこれって血？」

現崎は、台風の狂気にとりついてしまった。

深澤が、現崎をつかんだ。

「貴様、大山さんをどこへやった？」

「ハハハハハハ。貴様らが台風に攻撃するから悪いんだよ。取り返しがつかないよ。台風上陸まであと4時間20分だ。上陸直後にお前等を殺す。」

台風の狂気は、それを言って去ってしまった。

信じられないのは、西堀だった。

「台風の狂気に言っていることは嘘にしか過ぎない。」

しかし、台風上陸まであと3時間50分の時、臨時ニュースが入った。

「先程、相模原市警察署の前に大山火路論と呼ばれる男性が頭を粉々にされて死んでいるのを目撃されました。殺人の容疑とみて調べています。」

深澤が「冗談と言ってくれよ。」

高田はショックで座り込んでしまった。

松浦は、涙を流し始めた。

西堀は、クソを10回ほど言いまくった。

伊達は、和田原に言った。

「これでは、本当にたいふうのなく頃に東京は壊滅してしまう。」

和田原は「俺だって本当はやりたくなかったんだ。」

石川は、台風上陸までの時間を見た。

「ヤバいぞ。あと1時間30分とか俺達が生き残れる猶予時間があるまいない。」

現崎は「台風の神罰の二つ目を言って。」

深澤が言った。

「上陸直後、鉄筋で一人を刺すか押し潰して殺するだ。」

現崎は、高田に言った。

「二つ目の神罰は、高田さんあなたになります。」

「ちょっと待ってよ。僕が神罰の犠牲になるなんていやだよ。」

西堀が「現崎まさか台風の狂気と会話したのか？」

現崎は黙って首を下に下げた。

「貴様、そんなことを。」

伊達は、猶予時間のことばかり気にしていた。

台風上陸まであと1時間40分。

台風崩しの章 第二話 怒り（後書き）

コーナー設置に気が付きましたか？気象学が結構出てくる作品なのでコーナーでも置いて、勉強に役立つてもらい為に作りました。次回もお楽しみに。かんそうも宜しく。

台風崩しの章 第三話 壊滅(前書き)

事態は、次第にバッドエンドの方向へ

台風崩しの章 第三話 壊滅

「二つ目の神罰の生贄は、高田さんあなたになります。」

この言葉が、頭から離れられない。高田。

松浦は、大山の死にショックが強すぎたのか、落ち込んでいる。

深澤と伊達は、何かをしゃべっていた。

「現崎が言っていることは、気象庁にこのプロジェクトの16人目がいると言っていると同じ。っておいつ、そして誰もいなくなったという小説と同じとはいうなよ。」

「今の東京を巨大な館にして考えると、確実に台風の狂気と名乗る者がいるということになる。」

西堀は、ある事を言った。

「このプロジェクトは、定員が15名であり16人目は存在できません。」

和田原は、緊急事態のようにあることを言った。

「まずいぞ、台風上陸まであと25分だ。東京から出るにはきついで。」

高田は、気になることを言った。

「僕が、一番目なら、三番目の生贄になるのは誰？」

台風の狂気にとりついた現崎が再び言い始めた。

「三番目の生贄は、石川。四番目の生贄は、松浦と和田原。五番目の生贄は、現崎と西堀と伊達。六番目の生贄が、深澤だよ。クククククク。」

再び、元の現崎に戻った。

高田は、台風10号の勢力を見た。

「これは、まずい。」

深澤達は、勢力を見た。

台風10号の勢力は、カテゴリー5になっていた。

「こいつが来たら、本気でたいふうのなく頃に東京は、壊滅になるのかよ。」

台風上陸まであと3分

ひぐらしとつみねことたいふうの気象学講座。

こんにちは、みんな僕は、たいふうのなく頃にでお馴染みの高田だよ。

ひぐらしのなく頃にでお馴染みの北条紗都子さんとうみねこのなく頃にでお馴染みの右代宮真里亜さんです。

今回のテーマは、気圧。

「気圧って何だろう。」

「いろいろ考えたけど、あまり分からないわ。」

じゃー教えるね。気圧とは、空気の重さなんだ。

地上で測ると1000hPaになる。1hPa＝10キログラムだから1000hPa＝1万キログラムつまり、10tという重さになるんだ。でもね、生物にある圧力は、気圧に等しいからこの重さをあまり感じないんだ。気圧は、空気の重さだから、上空に行くと気圧は下がる。気圧が低くなると軽くなるので、気圧は、必ず小さくなるんだ。たとえば、5500mの山に登ったすると気圧は、約半分になるんだ。だから、山に登ると空気が薄いということに気付くんだよ。

「勉強になりましたわ。」

「なんだかおもしろかった。」

本編に戻るよ。

深澤と現崎は、逃げるための準備を整えた。

高田は「僕の話は、ほつといてよ。」

台風上陸というサイレンが鳴った。

7人は、高田を呼んだ。

「高田、早く逃げろー。」

高田の頭上から、鉄筋が高田の左腕を刺して動けなくした。

「僕のことは、いいから逃げて。」

深澤達は、逃げた。

高田は、更に降ってくる鉄筋に頭を押し潰されて倒れてしまった。左腕は切断されていた。

台風上陸から20分になってしまった。

深澤は、石川を安全なところに避難させた。

深澤が雷が鳴らないか、確認した。

そして深澤が、外に出た時、雷が建物の火事になりやすいところを直撃した。

「ウソだろ。ぎゃあー。」

石川の悲鳴が聞こえた。

松浦と西堀は、絶望を感じ始めた。

台風は、上陸をしてから25分が経った。

松浦と和田原は、先頭を歩いていた。

そして窓ガラスが、割れかけていたのが風の力で割れてしまった。

和田原の顔面に窓ガラスが刺さって、和田原は、何も言わずに死んでしまった。

松浦は、身体中に刺さって、彼女も何も言わずに死んでしまった。

伊達が、絶望を感じた声で言った。

「僕達は、みんな死ぬんだ。」

深澤は、伊達を慰めながら言った。

「台風の狂気に負けてどうするんだ。俺達には、生き残るという手段しか残っていないが望みはいくらでもある。」

西堀が、「人間VS自然。闘いの結果は、自然の勝ち。になるが俺達は、あきらめないぞ。だって、栄光は、人間あるのだからな。」

生き残った者達は、運命に逆らうことができなかつたことを後悔し始めた。

台風崩しの章 第三話 壊滅（後書き）

次回で、バッドエンドになります。そして新たな物語が始まる。ヒント言います。この謎を解くには、自然の不自然な人の殺め方です。自然は、人のように計画的犯行は、出来ないんですが、台風の神罰通りに人を殺していることがおかしいと思いませんか？自然の力は一定なのにもかかわらず、人間が操っているかのように自然の力が一定ではないんですよ。感想ページで皆さんの解答をお待ちします。

台風崩しの章 第四話 東京壊滅事件の謎（前書き）

展開が最悪になりましたか、次の章があります。期待しましょう。

台風崩しの章 第四話 東京壊滅事件の謎

台風上陸から30分経ってしまった。

深澤達は、絶望を感じながら逃げていた。

このままだと三人はつと振り向いた深澤。

三人は、大きな看板にぶつかり建物に衝突し三人は押し潰されて死んでしまった。

深澤は怒りながら言った。

「台風10号、貴様にはまだ負けない。たとえ何度もこんなことがあってもな。」

台風の狂気にとりつく、現崎はいない。

台風上陸35分が経った。

突然濁流が、深澤を襲った。

「しめんなさい。」

台風から、その言葉が聞こえた。

たいふうとうみねことひぐらしの気象学講座。

やあ、僕は、たいふうのなく頃にでお馴染みの吉村だよ。

うみねこのなく頃にでお馴染みの右代宮留弗夫さんとひぐらしのなく頃にでお馴染みの鷹野三四さんです。

台風の予報円がパワーアップしたってホント？

という題名です。

昔よりも、高性能になりました。それに、五日間も予報ができるという素晴らしいです。もしかしたら近い将来、もっともつと性能が良くなり、更には、七日間も予報で確ると思いますよ。上陸する前には、一時間の予報もできるかもしれません。其の時には、予報円がなくなつてまったく新しい進路予測が可能になると考えられます。

「おもしろかった。」

「台風つて神のランクに近い存在だけど結構そこまで来たんだ。」

1989年7月6日

静岡に、手紙が届いた。

ダイニング・メッセージのような手紙だ。

「この手紙を読んだのなら、私、松浦蟻音は、死んでいるでしょう。」

これは、ただの自然災害ではないことを言いたいだけなのです。謎を紡いでもらえばそれでいいんです。誰でもいいので私の死の謎を解き明かしてください。」

東京壊滅事件の真相は、いまだに明らかになっていない。

このお話の手掛かりは、台風の神罰の曖昧さである。

「あなた達に、ガツカリさせる気はないの。このお話の欠片は、私達よりも大切なことを教えているわよ。私の名前、貴方達は、知っているはずよ。意地悪だけど。」

お茶会

現崎の言動どおりにしてたら、運命は、少し変わったけど。

深澤は、言った。

大山は、「結局、時間切れのバッドエンドになってしまったなと思いますよ。」

「そうだね。」

西根と前木がいた。

「そういえば、君達もひどい目にあっただね。」

西根はこう言った。

「そういう運命でしたから。」

台風の狂気が現れた。

「次の闘いを期待しているぞ。愚かな人間ども。」

「今度は、人間が自然に勝つ。」

「ねじ伏せてやるから覚悟あるまでだ。人間共。」

闇側のお茶会

台風の狂気は、ある女性と出会った。

「あなたも、十分にゲームを楽しんでいるわね。」

「1000年も生きている魔女に言われたら照れる。」

「安心して、貴方のゲームの妨げはしないから。」

「無限に殺す魔女はどこ行った？」

「いないわ。ゲームに負けて悔しいのよ。」

台風の狂気は、1000年の魔女にこう言った。

「君は、確かある者と戦って勝利した。そして欠片は無限の可能性を生んでいると言ったが、吾は欠片をどう作るかは自由なのかと聞いているんだが？」

「自由よ。あなたが考える力で欠片が作られる。」

「これだから魔女は、まっ、自然の力は魔法に勝るからな。」

「貴方達も余計な奴に好かれたわね。でもあいつの考えを紡ぐという考えは甘くないわよ。正答率0・001%のこの難題にいくらでも挑戦しなさい。」

自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾たいふうのなく頃に

新章スタート決定。

竜巻を救えの章、2月10日スタート。

台風崩しの章 第四話 東京壊滅事件の謎（後書き）

次章もお楽しみください。

竜巻を救いの章 第一話 たいふうのなく頃に(前書き)

新章スタートです。そして、自然の新たなゲームが始まる。

竜巻を救えの章 第一話 たいふうのなく頃に

1988年9月に発生した台風は、東京に被害総額7000万円を出した。

その結果、前木は、父親と母親が亡くなったことを知った。

しかし、彼女に襲いかかった不運は、1988年12月にやってきた大寒波に前木を預かっていたもう一人の夫が、前木を大寒波の中追いだした。

1989年になり、彼女は、回復していた。そして、気象予報士の資格を取った。

1989年6月28日の台風10号排除前祝いパーティー！。

吉村と高田が楽しそうな顔をしていた。

「台風10号をやっつけて、俺達はヒーローになれるんだぞ。」

宮城と深澤は、楽しく酒を飲んでいた。

現崎は、伊達と松浦と一緒に作戦についてまとめていた。

円山は、心配顔の前木によって来た。

「どうしたんだよ前木。大丈夫うまくいくから。」

「そっだよね。」

和田原と大山は、種まきについて誰を戦闘機に乗せるか決めていた。

1989年6月29日

最終作戦報告書がまとめられた。

西堀が戦闘機に乗る人を決めていた。

「明日から作戦を実行する。戦闘機に乗るのは、6人だ。名前を発表する。高田と石川と光田と円山と宮城と前木だ。」

其の作戦実行は、6月30日に行われた。

高田は「僕、実は戦闘機にはちょっと弱いんだ。」

「大丈夫だよ。高田、俺がついてる。」と宮城は言った。

気象学講座

高気圧

周囲の気圧より高いところを言う。また、少し低めでも周囲がさらに低い場合は、高気圧とみなされる。by 深澤

たいふうのなく頃に

戦闘機は、上空に上がり台風10号のあるところへと飛んで行った。

吉村と西根が戦闘機の位置と台風10号の位置を確認した。

台風の狂気は、まだやってこない。

というよりも、嘆きと喧嘩していたようだ。

戦闘機五機は、台風10号にやってきた。

「ここが、台風10号の中か。」

台風のデータは、気象庁にかなり届いた。

台風10号の勢力 カテゴリー3となっていた。

過冷却の粉をばら撒いた。

台風の進路が4度だけずれた。

深澤と伊達が喜んでいたが、台風の狂気が現崎にとりついた。

「お前等が、台風10号の動きの妨げをしたな。台風の神罰を發動する。」

松浦が、台風の狂気にとりついた現崎に行った。

「台風の神罰って何よ?」

現崎は、言った。

「なら、教えてやる。台風の神罰は、お前らの行為をなかつたことにする罪滅ぼしなんだよ。第一の贄は、台風上陸6時間前に一人を



「気象制御は、するなと反対運動やっていたのにお前らなんてことを。」

台風の狂気は、台風の中で何かを企んでいた。

台風上陸まであと79時間。

竜巻を救えの章 第一話 たいふうのなく頃に（後書き）

次回の展開は、台風之神罰の正体をつかむことが出来ましたか？この章では

自然界の七大魔王の一人が姿を表します。誰なのかは言いません。次回もお楽しみに。

竜巻を救えの章 第二話 台風寺（前書き）

全貌の一部が少し出てくる。

竜巻を救えの章 第二話 台風寺

「気象制御は、やめる。自然教の罰が来るぞ。」

和尚さんは、そういった。

伊達は、信じられない気持ちでいっぱいであった。

台風上陸、33時間前に過冷却ミサイルが放たれた。

和田原は、伊達から聞いたことを警戒した。

現崎は、かまってくれるかと思ったら、唐突に、西堀が、こんなことを言った。

「台風の神罰の犠牲者は、否となる。」

台風の狂気が再び、現崎にとりついた。

「西堀は、馬鹿だな。台風の神罰は、発動したら最期、誰も生き残れない。第一の贄では、西根が生贄になる。第二の贄では、西堀だよ。第三の贄では、大山。第四の贄では、吉村と深澤で、第五の贄に、和田原と伊達と松浦を殺して、第六の贄に伊達を濁流に飲み込ませて殺す。つまり、台風の神罰の謎を解くことができなければの話だな。」

台風の狂気は、何処かへと言ってしまった。

現崎は、少し頭がクラクラしていた。

深澤は、台風上陸時間を見た。

「あと31時間か。どうにかして台風の神罰の謎を紡ぐことができないだろうか？」

伊達は、寝ていた。

みんなも少し疲れていた。

台風上陸まであと28時間だった。

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風上陸まであと19時間となった時、みんなは起きた。

不安が積もりながらも安定しながらいた。

台風10号の中では、あることが起きていた。

台風の狂気が誰かとしやべっていた。

「頼むぞ。」

「台風の狂気は、俺がいないとだめだな。」

「台風の神罰実行は、貴様がやれ。ルシファー。」

「狂気も、口達者だからな。」

そして、台風上陸6時間前近くになった。

西根が、怒りながら、台風に向かっていった。

「貴様に殺されるぐらいなら、殺してみる。台風はただの無力な力ぶるいの落ち武者だわ。襲うなら、鉞が、台風10号の心臓を射抜くぞ。」

台風の神罰は、突然、西根を襲った。

台風上陸3時間50分になった。

深澤達は、ショックを受けた。

「西根が、八王子市で遺体になって見つかっただと。しかも顔と首を抉られて。」

現崎は、台風の狂気が落ちて行ったものを見つけた。

深澤は、何身を呼んだ。

「ルシファーよ。自然教の新新約聖書の第300章第4節台風の神罰を実行しろ。そうすれば怨んでいる人間どもを簡単に殺せる。」

みんなは、驚いた。

竜巻を救えの章 第二話 台風寺（後書き）

次回は、第二のバッドエンドに向かっていきます。

竜巻を救いの章 第三話 生贄（前書き）

第四の贄までの展開となりますが、途中で深澤と台風の狂気の会話が入ります。

竜巻を救いの章 第三話 生贄

みんなは、びっくりしていた。

「ルシファーって？」

「そういえば七つの煉獄のことは知っているけど。」

「まさか自然界にそんなのが存在するわけないよね。」

現崎は、否定論を言った。

「いるよ。自然界の七大魔王は。」

深澤は、現崎の頬をたたいた。

「俺は、そんなものは存在しない。」

伊達は、深澤にあることを言った。

「深澤、僕は微かに覚えているけど、地球は二度寒冷化したって聞いたことはある。ある学者は、そのことを自然界の七大魔王の一人ルシファーがしたことだと述べてみんなの笑い者になったんだ。」

深澤は、ある一つの真実にありつけた。

突然時が止まり、台風の狂気と深澤の会話シーンになってしまった。

「何だ貴様。」

「台風の狂気を知らぬとは、馬鹿な者よ。」

「真実は、知った。犯人が人間であることにな。」

「ハハハハハハハハハハ」

「何がおかしい。」

「自然の真実をいよう。人間は犯人ではない。」

「どういうことだ。教える。」

「教えなくてもわかるだろ深澤識彦。」

「じゃ人間ではなく、貴様が犯人ということだな。」

「俺が犯人。馬鹿言ってるじゃないよ。第二の支配者！」

「第二の支配者ってどういう意味だよ。」

「自然の真実其の式、地球上では自然が第一の支配者であり、第二の支配者は人間である。人間は何度も自然に逆らうがいずれも吾が、

滅ぼした。」

「今回は、自然がもたらしたゲームに俺達が参加しているわけということだな。」

「そういうこと。」

「なぜ、今回も姿を現さない。」

「人間共の動きを観察する為だ。それと前のゲームは、自然の勝利が決まっていたからな。」

そして会話シーンは、終わった。

深澤は、どうやらこの真実にありつけたようだ。

「この鍵は、自然によって捕まっていることだ。それを救いだせば、簡単だ。」

伊達が言った。

「上陸まであと15分しかない。急いでここから出よう。」

大山と和田原は、不安そうな顔しながらもここから出た。

「さあー、ショータイムの始まりだ。」

自然界のルシファーが、東京タワーのてっぺんで叫んだ。

寒気团らしきものが放たれて、東京都庁に自然の怪物が召喚された。

そして、二つの建物は、自然の力によって崩された。

上陸直後になってしまった。

ビルの鉄筋が、突然折れて横に向き、西堀に向かった。

そして、血が周りに飛び散ってしまった。

みんなが、青ざめた顔をしていた。

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

西堀の顔面を鉄筋が貫いていた。

松浦は、腰が抜けてしまった。

深澤と現崎は、吉村に言った。

「第参の生贄は、大山ではなく、吉村やってくれるか？」

「別にかまわないけど。」

上陸してから20分が経過した。

吉村は、大山を押し倒した。

雷に打たれた吉村は、即死。

再び会話シーンになった。

「途中経過は、こんな感じだろ。」

「ふざけるな。これ以上人殺ししないように作戦があったんだぜ。」

「台風の神罰の生贄がちょっと変わったただけだ。」

「第四の生贄は、誰になる。」

「和田原と大山だ。」

「第五の生贄は、伊達、現崎、松浦になる。」

「設定変更もいい加減にしろよ。」

会話シーン終了。

台風上陸してから24分が経過した。

和田原と大山は、会話をしていた。

「ガラスが降り注いでもいいように傘を持って・・・あれない。」

「傘がないだと。」

25分になってしまった。

窓ガラスのガラスが割れて、二人の顔面や身体に突き刺さり二人とも死亡してしまった。

残った者で、語りたいたいことを言ったがそんな気分には乗れなかった。

そして、台風の狂気が姿を現した。

「こいつが、台風の狂気。」

「ハハハ、もうすぐ30分になるぞ早く逃げろ。」

深澤は、叫んだ。

「貴様のやっていることは、自然界でも罪だ。」

台風の狂気は、残り時間を見ていた。

次回、竜巻を救えの章 第四話 東京が壊滅

バッドエンド確定。

竜巻を救いの章 第三話 生贄（後書き）

次回は、さらに自然界の七大魔王が現れます。お楽しみに

竜巻を救いの章 第四話 東京が壊滅（前書き）

第五の巻で東京の壊滅シーンが一部浮かび上がる。

竜巻を救いの章 第四話 東京が壊滅

台風上陸してから27分。

伊達と現崎と松浦と深澤は、新宿の近くにいた。

台風の狂気は、寒気団を使い、車を次々と破壊していった。

「さあ、もがき苦しむがいい第二の支配者共が。ハハハハハハハハ。」

台風の狂気は、深澤達に出くわした。

「もう30分が経過してしまった。」

現崎は、深澤に重要な装置をあげた。

「こいつを使えば寒気団に勝てるよ。」

台風の狂気は、自然界の七大魔王アスモデウスとルシファーを召喚した。

「どうかしましたか、台風の狂気様。」

「吾が持ってきた大型バスを第五の生贄にぶつけてくれ。」

「了解しました。台風の狂気様。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

会話シーンになっていた。

「この自然界の七大魔王が全ての元凶だったのかよ。」

「深澤は、いいところを突いた後、間違えているな。」

「どどういうことだよ。一体、彼等を召喚した理由が分かればいいんだ。」

「深澤、お前は、前の世界では全て俺がやったことになるが、今回は共犯者といえそうで言えないものがあるのだぞ。」

「これはどうだ。自然界の七大魔王ではなく、そのように言う人間だったなら、犯人は人間になる。」

「自然の真実其三、自然界の七大魔王は、人間ではない。人にならぬ者。そして俺の家具である。」

「たいふうのなく頃に、東京は壊滅するっていうのは、嘘だ。これだけの建物を根こそぎ倒せることはできないぜ。」

「自然の真実其の四、自然というのは、如何なる時も目標が壊れることを前提に計画を立てる。」

「意味が分からねえ。」

「今回も自然の勝利だな。ハハハハハハ。」

松浦は、深澤に言った。

「私が、第六の贄を受けるから。」

深澤は、うなづいた。

そして大型バスが、三人を巻き込んだ。

松浦は、ショックだったが、ここで分かったのは東京の一部が破壊されていることに。

「そんなまさか。」

松浦は、ガラスの破片を持って、台風の狂気と闘う決意をした。

## 次回予告

竜巻を救えの章 第五話 惨劇は血未

次のゲームまでここを超えろ。

竜巻を救いの章 第四話 東京が壊滅（後書き）

バッドエンド確定になってしまいましたね。でもみんなが謎とき  
挑戦してくれば今回は、幾つかのカギが出てきます。

**竜巻を救いの章 第五話 惨劇は血末（前書き）**

お茶会にて、大変なことが分かる。

竜巻を救いの章 第五話 惨劇は血末

松浦は、武器を持っていた。

台風の狂気は、時間が35分になったことを確認した。

「さて、洪水を起こす準備を整えるか。」

台風の狂気は、魔法陣を描いて円周率を唱えた。

「3.141592653589793238462。さあ、台風よ鳴け、そして東京を壊せ。ハハハハ。ゲームオーバーだ。」

松浦は、マンホールの上にあった。

そして、マンホールのふたが2メートルまで上がり、松浦は、落下して左足を骨折した。

台風の狂気は、台風を殺戮状態にして置いた後、何処かへ消えた。

そして、松浦の頭めがけてマンホールのふたが落ちた。

鈍い音と共に、バッドエンドになってしまった。

お茶会

「台風の狂気、お前から一つ聴く復唱してもらおうぞ。」

「今回のゲームは、荒々しい。」

「良いだろう。今回のゲームは、荒々しい。」

「だったら、その後の東京を見せろよ。」

「深澤、次のゲームで見せることを約束しよう。」

竜巻を救えの章 第五話 惨劇は血末（後書き）

次回の新ゲームにより、さらなる真実は紡がれる。

自然現象の章 第一話 計画する（前書き）

政府が公表した台風操作計画に、欠点はないと思われたのだが・・・

## 自然現象の章 第一話 計画する

2年続けて酷い額である。

台風が日本に上陸していたことは確かだ。

台風操作計画は、そのために行われる。

15名は、科学者や一般の人もいる。

時は、1989年6月24日の世界だった。

これは、たいふうのなく頃にの第三の自然が作るゲームである。

6月28日台風操作実行の時が来た。

自然側も計画を立てていた。

「台風の狂気、それがやれるのか？」

「吾には、出来る人間の罪は、自然教の家具になれば罪は報われる。」

「それでは、これより自然幻想裁判を始めます。」

一方、人間界では、恐ろしいことが起こっていた。

其れは、台風10号が日本に来ようとしていた。

それに伴い、台風操作計画が実行へと移されるようになり始めた。

現崎は、嫌な予感はしていた。

これより紡ぐ世界がどんなものかをお見せしよう。

台風の神罰が、敗れる方法を考えてほしい。

自然現象の章 第一話 計画する(後書き)

次回は、冷却ミサイル発射です。お楽しみに

自然現象の章 第二話 冷却ミサイル発射(前書き)

実質不可解のゲームが始まる。

自然現象の章 第二話 冷却ミサイル発射

深澤と西堀は、誰を戦闘機に乗せようと考えた。

その結果、大山、石川、和田原、吉村、光田、宮城である。

台風10号に、過冷却の粉末をかけるという作戦である。

深澤と伊達は、幸運を祈りながら、変な会話をしていた。

「そついえば、去年ぐらいい変な形の彩雲が出ていたってニュースでやってたな。」

「俺も知っているよ。」

自然幻想回想シーンが映し出された。

「たくつ、何だよ台風の狂気は。」

「深澤、その彩雲は、未来ではフライング・サーペントと呼ばれる未確認飛行生物になっていると思うが、それは我々、自然が作り出

した一種の芸術作品だよ。人間には、生き物のように見せかけると  
いう悪戯心で、作り上げたのさ。」

「悪戯！」

「深澤、人間をからかうのは、自然の勝手だろ。」

「というより、ひとつ言う。台風的神罰とその生贄を教える。」

「いいだろ、台風的神罰は、第一の贄に、上陸6時間前に、一人を生贄として攫い、上陸3時間50分前に、現場から50キロメートル以上離れたところに遺体を置く。第二の贄に、上陸直後、一人を鉄筋で刺すか、潰して殺せ。第三の贄に、上陸20分後、雷が一人を襲って殺せ。第四の贄に、上陸25分後、風の力で窓ガラスが割れ、二人の体にガラスの破片を刺して殺せ。第五の贄に、上陸30分後に、三人が逃げているならば、風で大きな看板などで、三人を襲い殺せ。第六の贄に、上陸35分後、濁流で逃げようとしている者一人残らず殺せ。そして生贄は、第一の贄は、円山。第二の贄は、西堀。第三の贄は、松浦。第四の贄は、高田と西根。第五の贄は、伊達と前木と現崎。第六の贄に、深澤になっっているぞ。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

六人は、死んでしまった。

深澤も落ち込んでいたが、現崎があることを口にしていた。

「冷却ミサイルのスタンバイが、完了しました。」

深澤は、冷却ミサイルの仕組みを西堀に聞いた。

「ミサイルが爆発すると過冷却液体が飛び散り、台風を衰退させる仕組みになっている。」

西堀は、ミサイルを発射する準備を整えた。

伊達は、9時間後にミサイル発射という文字を確認した後、松浦と前木の前にやってきた。

「去年の特殊な彩雲を視ていたのか。」

自然現象の章 第二話 冷却ミサイル発射（後書き）

次回は、崇り。次回の展開は、一気に第四の巻まで行きます。

自然現象の章 第三話 祟り（前書き）

円山が、台風寺に行きあることを口にした。

自然現象の章 第三話 祟り

前木は、過冷却ミサイルに疑問があった。

それは、台風の部分に当たるが、下手に当てると台風の力が膨大化してしまう。

そのリスクがあるのにもかかわらず、発射しようとしていた。

「本当に大丈夫なのかしら？」

深澤は、ちょっと気にしていた。

過冷却ミサイルを発射してから2時間後、円山は、台風寺にやってきた。

「そうか、政府が台風を操作する計画を立てたのか。」

「実を言うと、台風は、生き物と考えていたのですが政府に笑い物にされました。」

「台風は、生き物だ。神の使いでもある。そいつを政府は操作してしまった。ということは祟られるぞ。」

台風上陸まであと6時間2分前。

伊達は、西根に言った。

「円山、遅いなあー。」

「もしかして、台風の神罰にあっているのかも。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

上陸まであと3時間48分。

高田は、涙目になっていた。

「嘘だろ、信じられない。」

それは、円山の遺体が、埼玉県熊谷市にあるという情報得ていた。

自然幻想シーンになった。

深澤は、台風の狂気に言った。

「前から、気になっていたが最初の神罰は、人間でも可能な犯行だ  
る。」

「自然の真実を述べよう。この神罰には、人間がかかわることはな  
い。」

「だったら、第二の神罰は、天災だ。」

「拒否する。」

「何だと。」

「自然の解明は、悪魔の証明を崩す。」

自然幻想シーンは終わった。

台風上陸まであと15分前。

第二の神罰前に、みんなは逃げていた。

台風上陸まであと3分。

西堀は、鉄筋のある場所で、鉄筋を拾った。

「どんな結末だろうが、俺は、台風の狂気をこの場で倒す。」

台風上陸。

台風の狂気が現れた。

西堀は、台風の狂気に問いかけた。

「たとえ自然であろうとこんな罪を背負いながらさらに人を殺すとは自然は、冷酷だな。償う気はねえのか。」

台風の狂気は、笑った。

「西堀は、自然が罪を犯すと言ったな。そんなものは、自然は恐れはしない。」

台風の狂気は、西堀を殺す自然の力を利用して鉄筋を崩そうとした。

「貴様。」

「死ね、第二の支配者が！」

西堀は、鉄筋の下敷きになって死亡した。

上陸してから20分が経過した。

松浦が、雷に打たれて死亡した。

台風上陸してから25分が経過した。

高田と西根は、急いで逃げたが、ガラスの破片が奇妙な動きをして二人を刺した。

生き残った者達は、次が来ないことを祈り続けた。

自然現象の章 第三話 祟り（後書き）

次回は、生き残り。お楽しみに。次回の展開は、第五の贄だけになります。

自然現象の章 第四話 生き残り（前書き）

寒気団が原因なのかと思いきや、暖気流だった。

自然現象の章 第四話 生き残り

自然幻想回想シーンがいきなり出てきた。

「もはや、一刻の猶予もないぞー。」

「うるせえよ台風の狂気。」

「深澤、台風の神罰を解答しても、謎はないさ。」

「いやっ！なぜ6つだけで台風の神罰になっているかと聞いているんだ。」

「そんなもの自分の力で、解読してみるよ。ハハハハハハハハ。」

台風上陸してから30分になりかけていた。

前木と伊達は、暗そうな顔をしていた。

現崎は、深澤と話していた。

「このまま、終わらせるわけにはいかないんだ。」

「でも、自然教の信仰者になるなんて言わないでほしいな。」

「自然教の家具になれと同じようなことだからだね。」

30分経過してしまった。

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風の狂気が現れた。

「さあ、第一の支配者の宴を始めようぞ。」

突風が、電車を巻き込み、逃げようとしている車を吹き飛ばし、ありとあらゆる力が盛り上がった。

大きな看板が、前木と現崎と伊達を巻き込んだ。

深澤は、此処ですでに決意をしていた。

自然教の信仰者になることを。

自然現象の章 第四話 生き残り（後書き）

次回は、台風の悪魔。お楽しみに

自然現象の章 第五話 台風の悪魔（前書き）

バッドエンドが確定。しかし次のゲームに続くとしてもない真実が  
明かされる。

自然現象の章 第五話 台風が悪魔

深澤は、台風上陸35分後になっていることを知ってしまった。

台風の狂気は、嘲笑う様に暖気流や寒気団という悪魔を召喚した。

「時間切れになったーさあ深澤、逃げ場はない。川に飛び込むと濁流に飲み込まれるぞ。」

「あいにく俺は、自然教の信仰者だ！」

怒鳴るような声で台風の狂気に言いつけた。

台風の狂気は、悪魔を一人召喚して、深澤の心臓を一突きにした。

そして川に落ちた。

台風の狂気は、笑っていた。

1989年7月5日 東京

台風10号により、壊滅された東京。痛々しい状況の中で、謎があった。

それは、東京都庁と東京タワーが消えていた。

バッドエンドになってしまった。

この状況を高気圧は見ていた。

「いたのですか、台風の狂気さん。」

「高気圧、此のたいふうのなく頃にというゲームですばらしい部分は特にないと言ったが、実はこのゲームで第二の支配者に此の出題のヒントが丸ごと出ていたことを知ってもらい買ったな。」

「台風の狂気も、さすがですね。実はこのゲームで登場する台風の神罰には、七番目のあれがあるというからね。」

裏お茶会

「台風の狂気、貴方、とんでもないミスをこのゲームでしているわ。」

「ベルンカステルに、言われる筋合いはない。」

「このゲーム、次のゲームでこれまでとは違った展開が起こりそうですね。」

「もし、そうなるなら、第4のゲームは、未来でゲームオーバーにしてやるよ。」

「うまくいくのかしら?」

「無理はない、今回は、楽勝過ぎた。」

自然現象の章 第五話 台風の悪魔（後書き）

次回は、過去と未来の章第一話2004年の謎。お楽しみに。次回のゲームで出題編終了となります。

過去と未来の章 第一話 2004年の謎(前書き)

台風の神罰の七つ目の贄が明かされる。そして台風の狂気の恐ろしい計画とは。

過去と未来の章 第一話 2004年の謎

2004年10月29日、1989年に台風を穢した者たちが全員死亡した。

原因は、相次いで上陸した台風が原因である。

「ハハハハハハ、たいふうのなく頃にというゲームは、終わりを告げたー。」

台風の狂気と高気圧は、楽しそうにその場を去った。

この戦いに何があったのかを解き明かそう。

1989年4月22日、長野の山奥。

深澤は、瞑想をしていた。

「台風の神罰は、7つある。7つ目は、2004年台風が上陸して、台風を穢した者を全員殺す。」

深澤は、びっくりした顔で、車に乗った。

現崎と伊達は、東京で楽しそうに遊んでいた。

「フライドポテトの食い過ぎには、用心しろよ伊達。」

「分かってるよ現崎！」

一方、自然界では。

寒冷低気圧と高気圧と寒気団は、台風の狂気を待っていた。

「待たせて悪いな。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風の狂気がやってきた。

「」無沙汰しておりました台風の狂気さん。」

「おー寒冷低気圧。ちょっとイメージチェンジをしたか。」

「台風の狂気、そろそろ始めますか。」

「我々、寒気団がいれば、怖い者ありません。」

「頼もしい者たちなら、吾も呼び出したぞ。」

台風の狂気は、自然界の七大魔王を召喚した。

1989年6月27日

台風10号を消滅させるために前祝いをしていた。

前木は、捨て身作戦を考えた。

過冷却ミサイルを二つ撃つことによって、台風が消える自信があると主張した。

西堀は、其の提案に乗った。

台風の新罰には、裏があることも知らずに。

過去と未来の章 第一話 2004年の謎(後書き)

今回は、過去と未来の章第二話勝利近し。お楽しみに

過去の未来の章

第二話

勝利近し（前書き）

作戦成功となるか？

過去の未来の章 第二話 勝利近し

過冷却ミサイルは、2発分。

深澤と西堀は、ミサイルの発射準備を整えた。

「よじつ、これで行くぞ。」

9時間を待つ間、現崎と伊達と吉村と石川と高田は、楽しくトランプで遊んでいた。

一方、自然は。

台風の狂気は、台風10号に急いで向かっていた。

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風の狂気は、寒冷低気圧とあることを話し合っていた。

「急ぐ」とはないぞ。」

「だが、第二の支配者の遊び道具にしていくわけにはいかない。」

「確かにな。」

前木は、心配そうな顔をしていた。

それは、ミサイル発射まであと1時間だった。

過去の未来の章 第二話 勝利近し（後書き）

次回は、終演。お楽しみにと言っても完結ではありません。

過去と未来の章 第三話 終演（前書き）

2004年に移行する。

過去と未来の章 第三話 終演

ミサイル発射まで、15分。

期待は、緊張に変わるほどすごかった。

伊達は、感心しながら言った。

「ミサイル発射されれば、次の9時間を待てばすむことだな。」

大山と西堀と西根は、緊張をほぐす為、煙草を吸っていた。

台風10号のやってくる進路は、東京だが、過冷却ミサイル一発分でも、千葉県にずれただけ、そう二発分撃てば、太平洋側に追いやりそして、消滅させることもできる。

「発射を行う。」

現崎が、キーボードを早打ちして、発射を行った。

過冷却ミサイルは、台風10号に向かっていった。

そして、台風内部で爆発。

台風10号の進路は、反れた。

「よっしゃ、次のミサイルの準備を整えろ。」

深澤は、次のミサイルの準備をしに行った。

次も9時間待つことになった。

台風の狂気は、千葉県に上陸することを知らずに、台風10号の中に入り込んだ。

そして、9時間後。

二発目のミサイルが、台風に衝突して、爆発。進路がさらにずれて、太平洋側に行った。

台風10号は、そのまま移動して、温帯低気圧となって消滅した。

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風10号消滅によって、歓声が響きあった。

その後、パーティーが開かれた。

台風10号を倒したぞーという声があちらこちらに聞こえている。

深澤と現崎は、謎の現象を目撃した。

それは、不可思議なことだが、それが自然界のロジックエラーであることは間違いない。

台風の狂気は、ボロボロな身体をしていた。

「くそつ、人間共が、2004年にたつぷりと殺してやるよ。ハハハハハハハハハ。」

台風の狂気は、そっぴいながら幻想へと消えた。

時は、2004年となった。

深澤は今、大学の準教授をやっている。

「懐かしいみんなと出会うとは。」

過去と未来の章 第三話 終演（後書き）

次回は、過去と未来の章第四話再開と仲間。お楽しみに

過去と未来の章 第四話 再開と仲間（前書き）

台風の狂気が、史上最大の赤の真実を明かす。

過去と未来の章 第四話 再開と仲間

深澤は、みんなに出会った事が物凄くうれしかった。

子供もいた。そう、気象庁に向かった。

其処には、小此木が気象庁のドアの入口近くにいた。

「警備担当の小此木だ。」

大山は言った。

自然幻想ワークに入った。

「深澤、2004年と1989年は、どれ位差があるのかな？」

「15年だ。それがどうした。台風の狂気！」

「自然の赤の真実、1989年6月29日、当時の気象庁長官、麻素深は、台風のデータを隠ぺいしているが、デジタル台風というサイトが明かしている。そして、吾が其の麻素深を殺した。」

「どづいづことなんだ。さっぱりわからない。」

「深澤、降参するか？」

「するわけにはいかない。ここから先に進む。」

「自然の赤の真実、台風の神罰には七番目の贄があるそして、お前からという時効を迎えた時に其れが発動する。」

「なにっ！」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

「はつきり言う、既に2004年6月28日だ。明日は、其の時効。」

「自然が殺人を犯しても事故になるんじゃないかねえのか？」

「実は、犯人がいたんだよ。人間側にしかもそいつの名は、西堀だ  
！」

自然幻想ワーク終了。

西堀と現崎は、将棋をしていた。

「また負けたよ。」

「西堀さん、こんで35連敗だよ。」

深澤は、伊達の子供と会話していた。

台風の狂気は、寒冷低気圧に言った。

「人間が罪を犯してくれたおかげでこちらは大助かりだ。」

「台風の狂気殿、ダイナソーブラッドの準備が出来ました。」

ダイナソーブラッドとは、自然がゲームマスターになった時に飲む  
ことが出来るお酒のことである。

過去と未来の章 第四話 再開と仲間（後書き）

次回は、過去と未来の章第五話悪魔再来。お楽しみに

過去と未来の章 第五話 悪魔再来（前書き）

時効成立とともに総攻撃が始まる。

過去と未来の章 第五話 悪魔再来

台風の狂気は、ダイナソーブラッドを飲んでいた。

「台風の狂気様、飲み過ぎると酔いますよ。」

「明日になれば総攻撃を始める。」

深澤と現崎は、心配をしていた。

西堀と大山にとっては、知りたくない情報がある。

デジタル台風のサイトを見ている西根の妹、東賀とうがにとっては信じがたい部分があった。

「これって何？」

台風10号は、所々で、衰退したり発達していることが分かった。

しかし、謎がまだあった。

同時に台風11号が、同じように衰退発達を繰り返している場所があった。

次の日になった。

時効成立になって自然も総攻撃をかける準備が出来ていた。

「まずは、8号を上陸させよう。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

自然幻想回想シーン

「深澤、此処まで来て分かってきたようだな。」

「当然だ。台風11号も変な行動に出ているなら他の台風はどつだ。」

「自然の真実、1989年に3つこのような台風が発生していた。」

「其の台風は、何号だ？」

「自然の真実、台風9号であ・・違う台風25号だ。」

「言いなおしたということは怪しいな。」

「怪しいわけではない。」

「一つ言っしてほしい物がある。台風8号の上陸場所を教える。」

「ふっ、良いだろう。自然の真実、台風8号は、伊豆半島に上陸する。」

「伊豆半島ってまさか？」

「お前等が行こうとしている場所だよ。」

「先を読んでしまったな。」

「深澤、屈服しろ。」

「残念だが、それは出来ない相談だな！」

過去と未来の章 第五話 悪魔再来（後書き）

次回は、過去と未来の章 第六話 罪集結。お楽しみに

過去と未来の章 第六話 罪集結（前書き）

総攻撃は、一人を殺す羽目に・・・

過去と未来の章 第六話 罪集結

台風8号が、刻一刻と、日本に接近し始めていた。

台風の狂気は、少しだけ笑っていた。

「吾の力を一気に出すことが出来るぜ。ハハハハ。」

寒冷低気圧は、ダイナソープラッドを用意した。

深澤は、台風8号が伊豆半島に上陸しようとしていた事を見つける。

「こいつは、15年前と似た経路だ！」

みんなは、ビックリしていた。

このままでは、最大風速35メートルで上陸する。

台風8号上陸まであと2日。

西堀は、台風の狂気と出会ってしまった。

「久方振りだな、西堀。だが此処で死んでもらう。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風の狂気と西堀は、闘っていた。

「お年寄りになってもスピーディだな！」

「五月蠅い。」

「寒気団、召喚。目標西堀。垣将を殺せ。」

寒気団が、西堀に襲い掛かった。

寒冷低気圧は、台風の狂気に言った。

「西堀を殺した後、深澤に出会うつもりですか？」

「其のつもりだが、何だ？」

「深澤が、台風をそらす為に、呼ばれた集會に来る半年前、犬15頭と猫20頭が死んだ事があつたな。」

「保健所にいた頃だな。」

西堀の首筋は、引き裂かれ、右腕と左足は切断されていた。

「さあ、罪を集合させるぞ。」

過去と未来の章 第六話 罪集結（後書き）

次回は、過去と未来の章第七話深澤の過去の罪。お楽しみに

過去と未来の章 第七話 深澤の過去の罪（前書き）

次第に明らかにされていく真実。

過去と未来の章 第七話 深澤の過去の罪

台風8号が近づき始めていた。

台風の狂気と寒冷低気圧は、気象庁に向かい始めた。

深澤は、台風の狂気を見つけた。

「こんなところで何しているんだ。台風の狂気が！戦いは終了したんだぞ。」

「自然の真実、1989年は戦いではなく、神罰で、2004年は、戦いである。」

「ということは、自然が今の人間に勝てると思っているのか？」

「西堀を殺した。」

「寒冷低気圧、それを言うな。」

「貴様等、西堀を殺したのか！西堀には、何の罪もないんだぞ。」

「黙れ、深澤。自然の真実、西堀には、25年前に子供が飼っていたウサギに毒薬を食べさせてしまったことにより、自然裁判の結果、死刑が確定した。」

「25年前、人間の世界では、時効を迎えているぞ。」

「自然の世界では、100年までが時効となっております。」

「深澤、お前にも罪があるんだよ。」

「罪、何のことか分からないなあ。」

「自然の真実、深澤は、15年前にまだ気象コントロールの特別部隊に派遣される前、保健所で働いていることが分かっている。そこで、引き取り手のない猫や犬を多数殺した。もちろん、犬や猫を捨てた奴等は、自然が全員処刑した。深澤お前も立派な罪人なんだよ！」

「俺だって辛かったんだよ！だが、上の者がやれと言った。」

台風の狂気は、其の上の者の生首を取り出した。

「深澤、自分が何者なのか分かるか？」

「なにっ！」

「自然は、自分が何者なのかという欲求はない。人間は、自分を知り尽くし過ぎている。」

深澤は、頭を押さえこんだ。

「自然と対立した人間が悪かったのかどうか分からねえー畜生ー！」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風の狂気は、一人の人物の判決を見ていた。

「そうか、大山は、死刑になったのか。」

深澤は、言った。

「大山にどんな罪があるのか教える！」

「自然の真実、大山には、32年前に実験に失敗して、山火事を起こしたという罪がある。そして先ほど判決が出た。死刑とね。そして死刑方法は、胸を抉った後、火をつける。となっている。」

「自然こそ、罪人じゃねえか。」

「自然の力に、罪人はない。むしろ全生命体の裁きの鉄鎚を下すのが我々だからな。」

深澤は、その後、大山に其の事を話して落ち込み始めた。

「自然に、そんなことを言われてもガツンと一発、反論すればいいのに。」

「自然には、自らの力で人間の言葉を覆してしまう。」

前木は、弱音を吐いている深澤の頬を叩いた。

「いつもの深澤は、どうしたの？」

「深澤、誰だ。それ？」

深澤は、自分の存在を知らなくなり始めた。

過去と未来の章 第七話 深澤の過去の罪（後書き）

次回は、過去と未来の章第八話ゲーム停止。お楽しみに

過去と未来の章 第八話 ゲーム停止（前書き）

ゲーム停止、それは自然の休憩時間となった。

## 過去と未来の章 第八話 ゲーム停止

深澤は、デジタル台風で、198910号のデータを見ていた。

「15年前の台風、これは俺達が戦った邪悪な敵。だったら前の9号と8号は、勢力の不安定さが一致している。」

深澤は、さらにあることに気付いた。

前木と西根は、深澤が言った事を聞いて驚いていた。

「自然は、厄介なことしていたのね。」

「というより、不味いんじゃない?」

「どづいつことだ?」

「大山がないのよ。」

深澤は、慌てていた。

「台風の狂気に、殺されるぞ大山が！」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

大山は、台風の狂気の家具、寒気団と暖気流に捕まっていた。

「おとなしくしろ。」

「台風の狂気様の為に、大山！痛めつけてもいいという命令が下るまで、貴様をロープと手錠で自由をしなければならんだよ。」

台風の狂気が嵐の如く現れた。

「大山を連れ出したか！しばらくは、休憩だ！」

寒冷低気圧は、台風の狂気に言った。

「ゲームをポーズ状態にするおつもりですか？」

「ああ、人間共を遊んでいる感覚を休めないと自然は、人間の良さに定着してしまうからな。」

「そうですね。」

たいふうのなく頃にというゲームは今、ポーズ状態となった。

その間に大山は、携帯電話で伊達に電話をかけた。

「出でくれ頼む。」

過去と未来の章 第八話 ゲーム停止（後書き）

次回、過去と未来の章第九話ゲーム再開。お楽しみに

過去と未来の章 第九話 ゲーム再開（前書き）

自然が罪？の活動を開始する。

過去と未来の章 第九話 ゲーム再開

「出てください頼む。」

伊達は電話に出た。

「もしもし、俺だ大山だ。」

「大山、何処にいるんだ？」

「暗い場所だ。」

深澤と現崎と西根と吉村は、急いで大山のところへ行こうとした。

「ゲームの茶番は、一時停止状態だ。急ぐぞ！」

台風の狂気は、大山を見ていた。

自然幻想回想シーン

「此の茶番、やけに長いぞ。」

「深澤、これまでは、瞬間的なものだった。」

「台風の狂気、これからは、どんな展開になってもいいように自然の真実を言ってくれ。」

「拒否する。」

「なにっ！だったら1989年のことは何なんだ。」

「自然の真実、1989年の台風に変なことが起きていたのは、自然という無限の魔法が誤って作動してしまっただけである。」

「つまり、誤作動ということか。」

「そっぴいことだ。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

台風の狂気は、ゲームをポーズから解除した。

「さあ、大山。処刑を始めるぞ。」

暖気流と寒気団は、霧を作り出した。

どうやら処刑を誰にも見られないようにした。

台風の狂気は、大山の胸に杭を刺した。

そして大山は、焼死体となった。

深澤達は、大山の変わった姿を見て悲しんでいた。

大山の胸に杭が刺さっていた。

深澤は、勘付いていた。

現崎は、自分の罪に気がついた。

「そういえば僕は、親に犬と猫などといった愚かな者を殺せと言われていたけど、断つたら虐待されると想い、次々とペット達を殺していった。その罪が自然に知られていたら殺される。」

現崎は、怯え始めていた。

台風の狂気は現崎の罪は許さないと告げた。

「現崎を殺すか。最後に殺した犬は、確か何だったけ？寒冷低気圧出てきてくれ。」

「どうかなさいましたか、台風の狂気様。」

「現崎が最後に殺した犬の殺害方法は何だったか教えてくれ。」

「はい、現崎が殺した犬の殺害方法は頭を耕して、内臓を全て取り出しました。」

「なら、その残酷な殺し方をしてみるか。ハハハハハハ。」

自然幻想回想シーン

「台風の狂気、やっぱりこういう手で来たな。」

「自然の真実、もはや気象操作した者達は、処刑が必要不可欠である。」

「貴様の茶番なんかにつき合い切れねえ。」

台風の狂気は、寒気団を利用して、現崎をさらった。

現崎は、台風の狂気を見て怯えていた。

「殺さないで頼む、罪は償ったから。」

「自然の真実、自然にはそんな罪を償ったところで許そうなんて思っ  
てはいない。さあ、現崎貴様は自然の生贄になりそしてその顔を  
耕した後、おなかから、内臓引っ張り出して、自然の生贄の犠牲者  
として讃えてやる。」

現崎の血が無数に飛び散った。

台風の狂気は、満足していた。

此の残酷な自然の力に深澤は気がつくのだろうか？

台風の狂気は、深澤を待ち望んでいた。

過去と未来の章 第九話 ゲーム再開（後書き）

次回は、過去と未来の章第十話現崎の死。お楽しみに

過去と未来の章 第十話 現崎の死（前書き）

自然との第四のゲームも最後に近づいてきました。此処から始まる究極のバッドエンドが発動する。

過去と未来の章 第十話 現崎の死

深澤達は急いで、現崎に向かった。

台風の狂気は、気象庁に向かっていった。

「急げ、寒気団と暖気流。松浦と西根を殺さなければ。」

寒冷低気圧は、台風の狂気という言葉に少しだけ笑っていた。

深澤達は、衝撃を受けていた。

「こんなことはあり得るのかよ。」

自然幻想回想シーン

「台風の狂気、いい加減にしろ！」

「深澤、何激昂している？自然は人間が自然に怒らせてはいけ  
ない罪を裁くことが出来るんだ。完全殺人事件としてね。ハハハハハハハハ。」

「ちっ。」

寒冷低気圧は、台風の狂気にある事を質問した。

「松浦と西根は、どんな罪でしょうか？」

「松浦は、蛙を踏みつけて殺したから、吾が踏みつけて処刑しようと考えている。西根は、せっかく育てた薔薇をぐちゃぐちゃにした罪で処刑という感じだ。」

「なるほどそういうことですか。」

台風の狂気は、気象庁を見つけて二階の窓ガラスを自然の魔法で全て割った。

松浦と西根は、驚いてしゃがんだ。

「何が起こったの？」

「行きましよう。」

西根と松浦は、二階の窓ガラスが割れていたことに驚いていた。

「何よこれ？」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

西根と松浦は、恐がり始めていた。

台風の狂気と暖気流と寒気団が現れた。

「さすがしい最後を迎えてみるかい？」

「やめて、来ないで！」

「無駄だ。台風8号がお前達の大声を塞いでいる。吾に逆らえぬ者達が！さあ、家具よ、此の二人を殺せ。」

「了解！」

深澤達は、戻ってきたときには、西根と松浦は死んでいた。

高田は、恐怖が頂上まで達してきていた。

台風の狂気は、深澤達を見て静かに嘲笑った。

過去と未来の章 第十話 現崎の死（後書き）

次回は、過去と未来の章第十一話殺戮の嵐。お楽しみに

過去と未来の章 第十一話 殺戮の嵐（前書き）

このお話の最後に深澤と台風の狂気の対決シーンが入ってます。

過去と未来の章 第十一話 殺戮の嵐

台風の狂気は、まず3人を生贄にと考えた。

「高田と石川と円山を処刑しよう。彼らの罪にお答えした処刑を家具達に任せるぞ。」

「了解。」

気象庁の屋上にいる高田達は、落ち込んでいた。

其処に、台風の狂気の家具達が現れた。

「何だお前は？」

「暖気流と寒気団だ。」

台風の狂気が現れた。

高田と石川と円山は、窓ガラスの破片を台風の狂気達に投げつけたが、避けられてしまった。

深澤達は、見てしまった。

高田と石川と円山が死んでいることに。

「殺され方は、不明。」

宮城と前木は、台風の狂気を見た。

「さあ、人間にとっては、殺戮の嵐を行おうぞ。台風9号が発生するまでに。」

たいふうのなく頃に

たいふうのなく頃に

深澤は、宮城と前木の遺体を確認していた。

伊達は、暖気流に殺された。

光田と吉村と和田原は、絶望の淵に追い込まれていた。

深澤の前に台風の狂気が現れた。

「深澤、自然教を信仰しても罪を償えることはない。」

「だったら、どうするんだよ。」

「この場所で、深澤、貴様を殺す。」

台風の狂気は、両腕から剣を出した。

「お前がそれなら、俺はこれだ。」

棒状の剣を右腕から取り出した。

深澤と台風の狂気は、剣のぶつけ合いをしていた。

台風の狂気の左腕の剣は深澤が壊したが、台風の狂気のスピードアツプした。

「なにつ！」

台風の狂気は、深澤の心臓部を背中から貫いた。

台風の狂気は、嘲笑っていた。

「これでゲームオーバーだ！」

和田原達の前に台風の狂気が現れた。

過去と未来の章 第十一話 殺戮の嵐（後書き）

次回は、過去と未来の章第十二話死闘の末。お楽しみに  
此処でたいふうのなく頃にの問題編が終了してしまいます。  
衝撃の解答編が、7月12日に始まります。

過去と未来の章 第十二話 死闘の末（前書き）

遂に、たいふうのなく頃にというゲームが終わってしまったが、ベルンカステルが深澤に勇気を与え、次のゲームに向けてストライキを開始する。

過去と未来の章 第十二話 死闘の末

和田原と光田と吉村は、台風の狂気の声に怯えていた。

「さあ、残った三人達よ。吾から逃れることも不可！吾を殺そうとも不可だ！」

和田原は、台風の狂気を視て震えあがった。

「俺を殺すなら、殺せ！しかし二人を残せ！」

台風の狂気は、それを否定した。

「嫌だね。御前等に罪がある限り、誰も生き残れない。」

台風の狂気は、右腕から剣を突き出して、吉村の腹を貫いた。

その次に光田の首を討ち落とした。

そして、和田原は、首筋を切り裂かれて死亡した。

台風の狂気は、嘲笑うように全てを台風9号に任した。

「さあ、台風9号よ。2004年の東京を破壊するのだ。」

こうして、たいふうのなく頃には完結した。

しかし、メタ世界では、深澤が落ち込んでいた。

「台風の狂気に勝てる方法がきつとあるはずだ。その方法がない限り、俺は、このゲームを抜ける。」

「待って、ゲームはまだ終わりじゃないわ。」

「誰だ、お前？」

「私は、奇跡の魔女、ベルンカステル。貴方に助言をしに来た。」

「助言？もうあいつには勝てない。お手上げだ。」

「台風の狂気は、10代も続いた者達よ。其処に貴方も入れるかも

「しれないわ。」

「ということは、第一の支配者に人間も慣れるということか？」

「そつよ。」

「だったら、台風の狂気をガツンとやっつけてやる。」

台風の狂気の前に、深澤とベルンカステルがやってきた。

「深澤、ゲームオーバーだというのにこの席に来るとは。」

「ゲームオーバーは、まだまだぜ。」

「どついつことだ？」

「このゲームに罪を追加して戦う。そして自然を屈服させてやる。」

「面白い！だったらこれより、たいふうのなく頃に罪のゲームを始めてやる。」

裏お茶会

「遅かったぞ、ラムダデルタ教。」

「台風の狂気が早いから困るよ。」

「このゲームの続きを紡ぐ為に、メソ擾乱を作る。」

「本気？」

「ああ、本気だ。」

過去と未来の章 第十二話 死闘の末（後書き）

いかがでしたか？問題編は、次は、解答編です。  
和解に導く戦いが遂に始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4924j/>

---

自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾、たいふうのなく頃に

2010年10月8日14時17分発行